ご 挨 拶

# 工学部だより

山口大学工学部長（応用化学科教授）　堤　　宏守

常盤工業会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、常日頃より工学部、山口大学に対しまして格別のご理解と多大なご支援を賜り、心よりお礼を申し上げます。

この「常盤」84号が皆様のお手元に届く頃には、山口大学工学部創立80周年記念事業やホームカミングデーなどが終了しており、その様子については、次号にご報告できるかと思います。今回は、既に終了しております大村 智先生講演会の様子などについて報告すると共に、工学部の現況と皆様へのお願いを述べたいと思います。

**山口大学工学部創立80周年記念講演会**
**大村　智先生講演会の開催**

創立80周年記念事業の一環として、2019年６月16日（日）に、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大村 智先生をお迎えして記念講演会を開催することができました。また、それに並行して国立科学博物館巡回展「ノーベル賞を受賞した日本の科学者」も実施しました（このパネル展示は、この後、宇部市図書館、おのだサンパークにおいても開催しました）。

この講演会は、元々、本学応用化学科の鬼村謙二郎先生が中心となって企画されていた、ノーベル賞受賞者をお呼びして直接お話を伺うことで、地域の高校生など次世代を担う青少年の科学する心を育てよう、励まそうという主旨の講演会を、80周年記念講演会として開催することにご賛同いただいたものです。これまでにも鬼村先生は白川英樹先生をお招きして講演会を開催するなど、地域の高校生などの励みとなるような活動を熱心に行っておられます。

講演会当日は、梅雨時期であり雨も心配されましたが、開会時には雨も上がり無事開催することができました。合計約400名の参加があり、主会場は小学生から大学生までの次世代を担う若者を中心に満員となり、一般の方や保護者の方々は中継会場からの聴講となりました。岡学長からの歓迎の挨拶の後、大村先生による講演「未来を拓く若者達に向けて～私の歩んできた道～」が行われました。ご講演では、次世代を担う青少年に向けて「出会いを大切にする」「信頼を得ることが大切」などのメッセージを交えながら、これまでの研究活動をご紹介いただくとともに、講演終了後には、中継会場へも出向かれて直接ご挨拶していただくなど、先生のお人柄が伺える一面もありました（大村先生の生い立ちや研究の苦労話については、大村　智著「ストックホルムへの廻り道　私の履歴書」日本経済新聞出版社 をご参照ください）。

なお、この講演会の開催にあたり、常盤工業会からご支援をいただきました。本誌上をお借りしてお礼申し上げます。

**100周年に向かって誰が、何を、どうするか？**

さて、創立80周年を迎え、次の100周年に向けて誰が、何を、どうするのか、という話をしたいと思います。昨今、国立大学を取り囲む様々な環境が厳しくなっていることは、皆様も新聞報道などでご存じかと思います。特に文部科学省から各大学に配分される運営費交付金が、年間１％ずつ10年間にわたって削減されており、大学の台所事情は厳しくなっております。さらに山口大学全体の収入（先述の運営費交付金＋学生からの授業料収入などの合計）の75％を教職員人件費が占めるようになっており、しかも運営費交付金のみでは、この人件費を賄うことができなくなっています。このため、定年退職した教員や職員の補充もままならず、学生教育に支障が出ないように、教員が研究に向ける時間を削るなどした結果、大学全体の研究力低下を招く事態となっています。

現在、日本からノーベル賞受賞者がほぼ毎年輩出されていますが、これは比較的余裕のあった時代にもたらされた研究成果が評価されたものが大半であり、今後、日本からのノーベル賞受賞者は激減すると言われています。

さて、このような状態で山口大学工学部は100周年を迎えることができるのでしょうか。今から100周年までには20年の歳月があり、社会情勢がどう変化するかも読めないところではありますが、この地域の高等教育機関としての山口大学、山口大学工学部の役割は今後も重要になってくるものと考えられます。一方、新しい時代に即した教育と研究を行うことを怠ってしまえば、その存在が危うくなることもあるかと思います。

この山口大学、山口大学工学部を継続的に発展させるために、教職員一同がさらに頑張るということはもちろんですが、周囲から必要とされる高等教育機関としての使命を十二分に果たす必要があります。「無い袖は振れない」の例えのごとく基礎体力を維持するための基礎的な財政基盤の拡充は極めて重要です。従いまして、この20年の間に工学部を財政面から支える仕組みをしっかりと構築することが重要となってくると考えています。言い換えれば、国に頼らない財政基盤を作り上げるしか方法はないと考えています。

そこで皆様にお願いです。100周年に向けて、毎年一定額でいいので、継続的に寄附をしていただけないでしょうか。一度に多額の寄附をしていただくこともありがたいのですが、細くとも息の長い支援をしていただけないかと考えています。例えばですが、「２万円／年×５千人＝１億円／年（54円／日）」の支援を工学部にお寄せいただければ、工学部の教育と研究の発展に大きな力となります（捕らぬ狸の皮算用、と言われそうですが…）。本年の創立80周年記念募金のご支援をさらに100周年に向けて継続していただければ大変ありがたいです。

現在、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業で山口大学工学部と様々な連携した活動を行っている山口県立宇部高等学校は、今年、創立100周年を迎えます。昨年末に、宇部高等学校の卒業生である本庶 佑先生がノーベル賞を受賞され、この100周年記念式典に際して記念講演会を実施される予定（11月14日開催）です。

山口大学工学部が創立100周年を迎えるまでに、同窓生や教員の中からノーベル賞受賞者を輩出できることを夢見ています。夢ではなく、現実のものとなることを期待したいと思います。

**宇部と工学部との関連から思うこと**

工学部の歴史を考える際に、宇部市との関連、特に宇部市の基礎を築いた先人に学ぶことの重要性は、改めて申し上げることもないかとも思いますが、少し振り返ってみたいと

思います。

現在、宇部市があるこの地域は、江戸時代にはほとんど何もなかったものの、石炭を産出したことから、農閑期に石炭を掘ることを生業とする人々が暮らしていました。その後、日清、日露戦争による石炭需要の急増に伴う炭鉱の大規模化が行われるようになりました。その炭鉱経営者の中の１人である渡辺祐策（すけさく）翁が中心となり、宇部の鉄道、水道などのインフラ整備や学校の建設をするようになってきた一連の流れの中から、山口大学工学部の源流となる宇部高等工業学校が創設されました。渡辺翁の言葉として有名なものに、「爺らが代には炭を掘りつくして、おまらアの時には何もないと孫に言われちアならん、長う続く仕事も残しておいてやらにや」（「宇部興産六十年の歩み」より）があり、その考えに基づいて、石炭や周辺において産出する石灰岩などを原料にする化学工業などの企業を宇部市に興すことで、今日の宇部市発展の礎を築いてきました。「いずれは掘り尽くしてしまう有限の石炭を、工業の無限の価値に展開し、地域に永く繁栄をもたらそう」（宇部興産Webページより引用）という理念をこの宇部の地に形として残していただいたと考えております。山口大学工学部においても、この精神を引き継ぎ、教育、研究を通じて有限の資源（学生）が無限の可能性を発揮するための能力の醸成と機会を提供することを目指しております。

最後に、改めて皆様にお願いです。山口大学工学部が置かれている状況を少しでも改善するために、力をお貸しいただけませんでしょうか。寄附（実習用や実験用機器の現物寄附でも結構です）という形でのご支援のみならず、激励のお手紙、メール、Facebookへのいいね！でも結構です。息の長いご支援をどうかよろしくお願い申し上げます。

## 山口大学工学部創立80周年記念事業募金にご協力をお願いいたします

**1口　5,000円（何口でも結構です）**

**応募の方法**

**同封の払込取扱票（兼寄付申込書）により、郵便局からお振込みください。（すでに寄付をいただいている方にも同封されております。ご了承ください。）**

**問合せ先**

山口大学工学部総務企画課
〒755-8611　山口県宇部市常盤台2-16-1
TEL　0836-85-9003